

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008 ～ 2010

課題番号：20530551

研究課題名（和文）

介護職の自己実践評価と記録方法に関する研究

研究課題名（英文）

A Qualitative Research on Practice Records of Caring Professions

研究代表者 狭間 香代子 (HAZAMA KAYOKO)

関西大学・人間健康学部・教授

研究者番号：70331733

研究成果の概要（和文）：

介護老人福祉施設の介護記録のあり方を調査するために、第1に介護記録の記述内容を客観的記述と主観的記述に分類してその頻度を調べた。その結果、主観的記述の割合が1割に満たないことが明らかになった。第2に施設長等へのインタビュー内容をデータ化して質的分析を行った。その結果、介護記録の役割として「記録の証拠化」「情報の共有化」「専門力の向上」という3つのプロセスを抽出し、「記録の証拠化」を中核として位置付けた。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this research is to investigate the way of the care records in nursing homes.

First, I classified contents of the care records in objective descriptions and subjective descriptions, and examined the frequency of them. As a result, the ratio of subjective descriptions was founded less than 10%.

Second, I made qualitative analysis of dates which I made interviews to directors of nursing homes. As a result, I extracted three processes as the roles of care records. They are the evidencing of records, the sharing of information, the improving in professional skills. The core is the evidencing of records.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：高齢者福祉

1. 研究開始当初の背景

社会福祉実践の記録方法に関する研究は、記録を実践のための一つのスキルとしてとらえる傾向が強く、理論的研究は少ない。しかし、今日の社会福祉専門職の社会的地位の低さという現状に鑑みると、記録を通しての実践研究の積み重ねが専門性の向上に資するとともに、専門職の社会的認知を高めるために貢献すると考えられる。

この状況は、介護福祉領域において顕著である。近年に出版された文献は、ほとんどが介護記録の書き方というハウツー的なものであり、記録と専門性向上を問う理論的研究は見られない。

社会福祉専門職が専門職としての資質を向上させるために、自己の実践をいかに記録し、それをいかに評価するかは、専門性向上のために不可欠であり、記録活用の方法を明確化する研究は重要である。

2. 研究の目的

本研究では、特に介護職と記録の問題に焦点を当てて、介護記録を自己評価に活用するために必要な課題について調査を通して明らかにすることを目的としており、以下の4点に焦点化する。

第1には、実践を言語化する上で介護職が抱える問題の抽出である。介護職が自己の実践を記録する上で、文字化を困難にしている要因を引き出すことを目指す。

第2は、施設管理者の介護記録の取り組みについての比較検討である。介護職が介護記録に書く内容は、施設管理者の考え方を反映する。そこで、記録内容と施設管理者の記録に対する方針との関連を問う。

第3は、介護福祉職が自己の実践の振り返りに記録をいかに活用しているかの分析である。専門性向上のためには、実践の記録が不可欠であるが、それらの活用法の問題点を抽出する。

第4は、介護職の実践内容を専門性の向上に結び付けるために、必要な記録方法について検討する。特に、介護職の主観的記述にして分析する。

3. 研究の方法

本研究は方法の異なる2つの調査研究から構成されている。第1は介護記録における内容の分類であり、第2は施設長などへのインタビュー内容の質的分析である。

(1) 介護記録の記述内容の分類

この調査では、5つの特別養護老人ホームから提供された介護記録の内容を分類して、その結果をまとめた。提出いただいた介護記録は、各施設に入居する1名の認知症利用者

の6か月分の介護記録である。これらの記録の中から最も記述の多い月を選び、その中の自由記述欄を分類の対象とした。分類の目的は介護職による主観的記述と客観的記述の頻度の比較である。各々の記述については、表1に示す基準にしたがって分類した。

自由記述欄の分類基準 (表1)

	分類項目	内容
客観的 内容	1-①観察した利用者の状況	利用者を取り巻く環境についての観察記録
	1-②観察した利用者の行動	利用者自身の行動についての観察記録
	1-③利用者と介護職との相互作用	利用者の言葉や介護職とのやり取りが記された記録
	1-④介護職が実施した介護行為	介護職の介護行為自体の事実記録
	1-⑤根拠説明がある介護行為	介護行為の理由が記されている記録
主観的 内容	2-①介護職の推察や解釈	利用者の行為などについての介護職の解釈などの記録
	2-②介護職の判断	利用者の行為や介護行為について、根拠に基づいた判断が記された記録
	2-③介護職の考察・提案	これからの介護方法などについての考えや提案などの記録

以上の分類基準に則って、上記の対象であるデータを分類し、各々が記録された頻度を比較した。

(2) インタビュー内容の質的分析

第1段階の調査分類の結果を受けて、第2段階の質的分析を実施した。ここでは介護記録の提出のあった施設の管理者等に介護記録に関するインタビューを実施し、その内容を逐語録化した上で、データとして分析した。分析方法は、佐藤郁哉のいう漸次構造化法を採用した。この方法を採用した理由は、データのとらえ方にある。佐藤はデータが語るのではなく、調査者がデータを解釈するのであり、そこには解釈する者の先入観が入り込まざるを得ないというが、研究代表者はこの

立場を共有するからである。

調査参加者は各施設の施設長または介護記録について責任のある立場の方である。インタビューは半構成法で実施した。あらかじめ、ある程度の質問ガイドを作成した上で、インタビューに臨んだ。しかし、調査参加者の自由な発言を優先し、必ずしも質問事項に沿った流れで行われた訳ではない。

データの分析は、オープンコーディング、焦点コーディング、事例コードマトリックスの作成、概念モデルの作成、ストーリー化という手順で実施した。

4. 研究成果

本研究の成果は2つの調査の結果から構成されている。第1の調査結果を受けて、第2の調査を行っているので、研究成果についても段階的に説明する。

第1は、介護老人福祉施設の介護記録の内容を主観的記述と客観的記述に区分して、それらの頻度を比較調査したものである。第2は施設長等にインタビューを行い、その逐語録をデータとして、質的分析を行った結果である。

(1) 介護記録の記述内容の分類結果

調査の結果としては、次のような2つの結果を挙げることができる。一つは、見出し項目の意義であり、もう一つは介護記録の内容における事実記録の多さである。なお、5施設については、A、B、C、D、E施設として表記している。

①見出し項目の意義

介護記録の提供があった5施設の中で、4施設がパソコン入力を導入している。これらの使用ソフトは異なるが、記録の概要を見出し名で指示している点で共通する。見出し名というのは、例えば「食事」「不穏行動」など記述頻度の高い内容を要約した言葉である。これらの見出し項目は、介護記録の中で次のような働きをしている。まず、記録者以外のものが見出し、その内容を理解できるという点である。さらに、記録者にとっても利便性がある。何を記録すべきかについて、ある程度の見出し名が例示されていることで、日々の雑多な利用者に関する情報から何を選択すべきかを指示してくれるからである。何を観察し、何を記録するかの指示は、介護職にとっての記録を容易にしている。これらの見出しがどのような役割を果たしているかは、次のインタビュー内容の分析で明らかにする。

②自由記述分類の検討

介護記録の内容分類から、5つの施設では記録内容の大部分が事実記録であるという

ことが導きだされた。各施設の客観的記述の割合は、A施設 94%、B施設 100%、C施設 95.3%、D施設が 88.5%、E施設が 99.8%となっている。いずれの施設でも、介護記録のほとんどが客観的記述で占められていることが判明した。これらの中で手書きを採用するD施設において、主観的記述が11%となっている点に特徴がみられる。

主観的記述と客観的記述の比較(表2) %

	分類 項目	A	B	C	D	E
客 観 的 内 容	1-①	1.0	0	4.7	1.0	2.2
	1-②	85.0	70.5	66.7	46.9	20.6
	1-③	0	29.5	4.7	3.1	2.8
	1-④	8.0	0	9.6	32.3	61.2
	1-⑤	0	0	9.6	5.2	13.0
主 観 的 内 容	2-①	4.0	0	4.4	7.3	0.2
	2-②	1.0	0	0	0	0
	2-③	1.0	0	0	4.2	0
計		100	100	100	100	100

(2) 証拠化する介護記録—質的調査の結果と考察

第2の調査分析では、データに基づいて、データが意味することを解釈した結果、調査参加者である施設長などが施設での介護記録の役割をどのように認識し、それに基づいてスタッフにどのように指示しているかというプロセスに着目した。

その結果、介護記録の指示に関する行為のプロセスは「記録の証拠化」「情報の共有化」「専門力の向上」という3つのプロセスで示されることを抽出した。その中で中核となるプロセスが「記録の証拠化」である。これらの関係は全体図(図1)で示される。

介護保険法の施行以降、施設には各種の記録保持義務や開示義務が課せられるようになった。これらは各施設にさまざまな影響を与えている。何よりも、外部に対する証拠としての介護記録の機能が重視されるようになった。それを「記録の証拠化」のプロセスとした。これは記録の義務化、求められる証拠能力、効率化とのジレンマ、客観的記述の重視という4つのカテゴリーから構成される(図2)。記録の義務化は、家族などへの記録の開示を義務付け、それは記録に証拠としての能

力を付加させることになった。一方で、忙しさの中で、記録を書くことの負担を軽減するために、効率的な書き方を求める方向も模索され、効率的でかつ証拠となる記録としての客観的記述を一層重視させることになった。

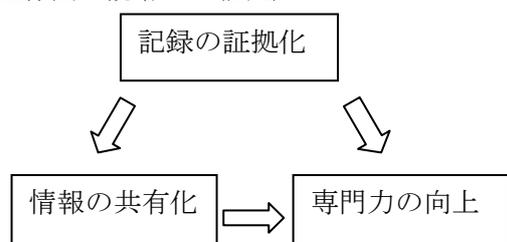
また、記録には従来から職員間の情報を共有するという機能があり、それらを「情報の共有化」のプロセスとした。このプロセスには多様な職種がかかわる介護場面では重要であるが、ここにも記録の証拠化が影響している。家族への開示を前提とすることは、介護職が何を記録に残し、何を口頭で伝えるかということの判断に影響している。このプロセスには、残す情報と残さない情報というカテゴリーが含まれる(図3)。

介護記録を専門力向上に活用するプロセスは「専門力の向上」と捉えられる。このプロセスには、記録によるスキルアップ、専門力向上を目指す、介護職をめぐる社会的背景というカテゴリーがある(図4)。証拠化する記録の影響は、介護職が実践の根拠を書く力の育成を阻んでいる。また、専門力の向上には記録以外の方法が採用されており、記録と専門力向上に強い結びつきが見られない。

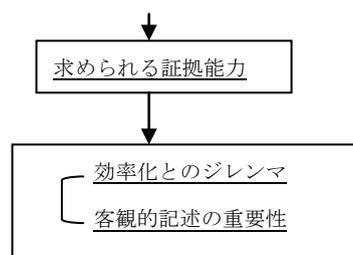
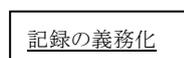
介護保険が施設に介護記録などの保持義務や開示義務を課したことで、施設の側では公開を前提とした記録方法を重視している。その結果、施設の介護記録がもっているスタッフ間の情報の共有やスタッフの専門力の向上のために役立てるという目的は、証拠化が重視される中で、後方に退いていることが示された。

本研究の目的は、介護職が自らの実践を振り返ることで専門性を向上させていくためには、経験知の積み重ねが必要であり、そのために実践を記録に残すことでそれらが可能になるという立場から開始された。しかしながら、実際には記録の証拠化が優先されている現状が明らかになった。今後の課題は、証拠化する介護記録からいかに専門力向上に結び付くような記録の方法を導き出せるかであると考えられる。

全体図の概略 (図1)



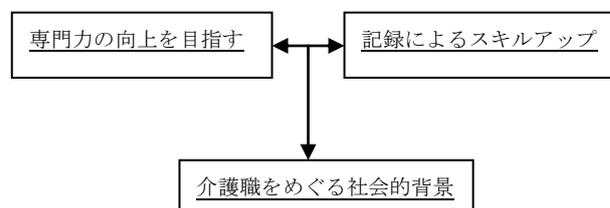
記録の証拠化 (図2)



情報の共有化 (図3)



専門力の向上 (図4)



5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

① 狭間香代子、介護職の自己実践評価と記録方法に関する研究[証拠化する介護記録]、報告書、査読無、2011、1-49。

② 狭間香代子、「高齢者施設の介護記録内容の分析」、関西大学インターディパートメント論集第3号、査読無、2010、37~48。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

狭間香代子 (HAZAMA KAYOKO)

関西大学・人間健康学部・教授

研究者番号：70331733